

専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

18回生の早田涼佑です。

私は、専攻科を卒業して2年くらいになります。今は豊橋の障害者支援施設に勤めています。利用者さんと楽しく日々を過ごしています。こうした生活があるのは、専攻科福祉専攻との出会いがあっての今だと思います。少し私のいきさつを話しますと、豊橋創造大学短期大学部へは「保育園・幼稚園の先生」になりたくて入学しました。幼児教育・保育学科（以下「幼教」）卒業2か月前まで「保育士」を目指していました。ですが、授業やゼミでお世話になった先生との相談の中で「保育士」だけだった視野を変えてくれました。専攻科の学生になるための手続き期限ギリギリまで悩み、「専攻科福祉専攻」へ進学を選びました。

ふと振り返ると、様々な出会いがありました。

当時、私が在籍していた年度は、学生は7名でした。幼教の頃と比べると、1クラスにも満たない人数でした。授業では、課外学習で施設等に出かけたりしていました。今の社会情勢では、難しいかもしれませんが。その中で特に印象に残っている出来事があります。とあるグループホームに訪れた際に、娘さんがグループホームへ入所することでご本人とご両親がいらしてました。「入所させる側（娘さんのご両親）」の思いを聴かせていただく機会があり、お辛いことなど、ありのままに話してくれました。感想を求められ、自分が思ったありのままを話していると、言葉が詰まり、涙があふれてきました。ご両親の思いに直面し、とても自分がどこか情けなく感じ、悔し涙だったと思います。「人の痛み」を痛感したように思います。このように、施設の利用される方や、保護者の方々、施設に勤める施設の方々、数えきれないくらいの方にお会いし、色々な人間ドラマを見させていただきました。

「人の痛みを知ってこそ、本当に人に優しくできる」対人援助職の一人間として、様々な出会いで気づいたことを心に留めておく。それこそが専攻科福祉専攻があったという証になるものと思います。

2021年12月

18回生 早田涼佑